

令和 2 年 6 月 15 日現在

機関番号：12501

研究種目：国際共同研究加速基金（国際共同研究強化）

研究期間：2017～2019

課題番号：16KK0023

研究課題名（和文）現代アメリカの政治文化における音楽の役割（国際共同研究強化）

研究課題名（英文）The Role of Music in Contemporary American Political Culture(Fostering Joint International Research)

研究代表者

館 美貴子 (Tachi, Mikiko)

千葉大学・大学院人文科学研究院・准教授

研究者番号：60376580

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 5,600,000円

渡航期間： 6ヶ月

研究成果の概要（和文）：本研究は、基課題「戦後アメリカにおける保守派の社会運動とカントリー音楽の相関」（若手B）を発展させるものであり、1970年代までに顕在化したカントリー音楽の右傾化と保守派の政治との結びつきが、それ以降今世紀に至るまでどのように継続あるいは変容し現在に至るかを解明することを目的としている。特に、大統領や大統領候補者による音楽利用の歴史を今世紀まで紐解き、党派を超えてカントリー音楽が利用される様相を明らかにするとともに、テロとの戦いにおける同音楽家の言動やそれをめぐる報道や議論を音楽ジャンル間や国際的な比較も通して解析した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、学際的な視野からアメリカ文化を論じるものであり、特にこれまで左派の政治と音楽の関係に比して十分な学術的な関心が払われてこなかった保守派の政治と音楽との関連性に焦点を当てていること、音楽を1980年代以降の変容の相において捉え歴史的に位置づけていること、トランスナショナルな視点を取り入れ国際的な学術貢献をしていることを特色としている。さらに、今世紀のアメリカにおいて音楽の政治的意味が交渉され利用される様相を解明することは、今日のアメリカ理解にもつながる実利的な意義がある。

研究成果の概要（英文）：This research is an extension of the project "The Relationship between Conservative Social Movements and Country Music in the Post-WWII United States" and examines the ways in which the tendencies that were established by the 1970s -- the rightward shift of country music and the close ties between conservative politics and country music -- transformed and developed in the following decades and into the present century. It analyzed in particular presidential politics involving country music from the 1980s to the present and revealed the ways in which both parties utilized the music to suit their needs. It also conducted cross-cultural analyses of the ways in which musicians responded to the War on Terror and how they were debated and reported.

研究分野：アメリカ文化論

キーワード：現代アメリカ 音楽 政治文化

1. 研究開始当初の背景

本研究「現代アメリカの政治文化における音楽の役割」は、基課題「戦後アメリカにおける保守派の社会運動とカントリー音楽の相関」を発展させるものであり、1980年代から現在までのアメリカにおいて政治家や活動家がどのように音楽を利用してきたのかを大統領選挙を始めとする選挙活動や広告に焦点をあてて分析をするものである。1970年代までに顕在化したカントリー音楽の右傾化と保守派の政治との結びつきがどのように継続あるいは変容し現在に至るかを解明するとともに、殊に2000年代のテロとの戦いを契機にプロテストソングの興隆など音楽界が政治への関与を深めたなかで、カントリー音楽家が行った活動とその意味について分析を行った。

カントリー音楽はイギリス民謡などをルーツとし、アメリカ南部の白人労働者階級のポピュラー音楽として発展したが、歴史学者ビル・マローンが述べるように、1960年代くらいから体制擁護的な性質を帯びるようになり、保守派の国政と連想付けられるようになった。また今世紀では、2001年同時多発テロをきっかけとしてカントリー音楽家がテロとの戦いを称賛する国粹的な歌を多く作ったことや、イラク戦争開始直前にロンドンでのコンサートでブッシュ大統領を批判する発言をした人気カントリー音楽家がカントリー音楽ラジオ局からのボイコットなどを受けて活動休止に追い込まれたことなどにより、この連想が一層強まった。

基課題では、第二次世界大戦後から1970年代までのカントリー音楽の歴史を検証することにより、マール・ハガードによるカウンターカルチャーを批判し反戦活動や政府批判を行わない田舎町の青年をたたえた歌や、ガイ・ドレイクによる勤勉な納税者を後目に福祉を悪用して贅沢をする人間を描いた歌のように、体制擁護的で保守派の政治思想を明示的に代弁する曲をカントリー音楽家を作るように至った歴史的経緯を明らかにし、これらの右傾化したカントリー音楽が保守派の社会運動で果たした役割を考察した。例えば、公民権運動時の南部における選挙戦で人種隔離を掲げた候補者がテーマソングや政治集会の客寄せとしてカントリー音楽を利用したことが、同音楽と保守的な政治思想との結びつきを強めたことが示唆された。前述のような明示的な政治的メッセージを持つ歌が作られるようになる前段階として、カントリー音楽家と南部の政治家が選挙戦などを通して結びつきを強めてきたことも明らかになった。例えば1958年のアラバマ州知事選の民主党予備選挙では、すべての候補者が人種隔離を公約し争点の違いが明らかにならない状況のなかで、候補者が集会でスピーチを行う前にカントリー音楽の演奏が行われたり、カントリー音楽家が候補者を聴衆に紹介するなどカントリー音楽を利用して有権者集めをしたことなどが当時の現地の新聞などで報じられている。また、ジミー・デイビスのようにカントリー音楽家が州知事になった例もあり1944年および1959-1960年におけるルイジアナ州知事選の際に、選挙テーマソングとして彼が作者ともされた有名曲を利用している。特に後者の選挙では公民権運動が高まるなか人種統合に反対する白人有権者の支持を得るため「州の権限」を主張し徹底した人種隔離をかけた。歌詞自体には政治的メッセージはないものの、保守派の南部白人の価値観とカントリー音楽とを政治的な場面において強く結びつける役割を果たした。

1968年の当選が保守派の社会運動の勝利の重要な過程とされているニクソン大統領は選挙戦中だけではなく大統領就任後もカントリー音楽をアメリカを代弁する音楽であると述べ、彼が「サイレント・マジョリティー」と呼んで味方につけた、プロテストやデモ参加をせず仕事をして税金を納める人々を称賛する音楽として好んだ。また、1960年代以降の保守派の社会運動で主力となったのは新興の福音派であり、歴史学者リサ・マクガーが論じたように、南カリフォルニアのオレンジカウンティを代表とするような郊外の新興住宅地の中産階級を主力な支持層とした福音派は、それまでの反共主義を中心とする保守派とは異なり、道徳的文化的な争点をかかげて主流社会へ入り込み政治活動を行うことで発展した。上記のような曲を称賛しカントリー音楽家を厚遇したニクソン大統領に見られるように、右傾化したカントリー音楽は政治家にとって自らの思想を代弁する有効なメディアとみられるようになった。基課題での研究では、カントリー音楽の聴衆が同時に政治集団として認識され、例えば1970年のカリフォルニア州知事選では候補者がカントリー音楽のラジオ局の聴衆をターゲットとして、経済政策を打ち出して有権者に訴えようとしたものの、経済的に困窮する有権者がなお文化的な争点を重視する立場を強く持っていたことが明らかになった。カントリー音楽の聴衆が政治的な集団として候補者に認識されたと同時に、彼らが当時の保守派の運動に合致するような政治意識をもっていたケースが明らかにされた。

2. 研究の目的

本研究では、上記のような研究成果と問題意識を発展させるものとして、第二次世界大戦後くらいから1970年代までに顕在化したカントリー音楽の右傾化と保守派の政治との結びつきが継続あるいは変容し現在に至るまでの経緯を解明することを目的とした。現代アメリカの主要な歴史的事象の中で、政治家や活動家がどのように音楽を利用してきたのかを、同時代の音楽家による政治との関わりとも関連させて明らかにすることを目指した。特に選挙選とメディアに焦点を当て、選挙広告や政治集会などの場面における音楽の役割や、音楽家と政治家、活動家の関係について、党派間や音楽ジャンル間の比較も行いながら検証を行った。対象とする

政治家や活動家、音楽家に関する歴史的資料や記事、伝記、手記などの検証、対象とする選挙戦や活動に関する視聴覚情報を含む歴史的資料の収集と分析を通して、現代のアメリカ政治文化における音楽の役割を明らかにすることを目的とした。

3. 研究の方法

基課題が対象とした時代の先である1980年代から現在にまで視野を広げ、カントリー音楽の右傾化および政治的保守との連想が継続あるいは変容し現在に至る経緯を解明し、現代のアメリカ政治文化における音楽の役割を明らかにするため、政治家や活動家、批評家の活動や思想に関する映像を含む歴史的資料や同時代的な報道等の収集と分析、カントリー音楽家の思想や作品の分析、それらの比較検討を行った。半年余り米国ブラウン大学アメリカ研究学部で客員研究員として研究を行い、同大学ジョン・ヘイ図書館所蔵の1980～1990年代頃の保守勢力に関するアーカイブ資料の分析や、2000年代におけるカントリー音楽家による政治活動とそれを巡る批評などに関する分析を進めるとともに、主に大統領選の音楽に焦点を当てて、文献やデジタル資料を分析した。同大学における共同研究者との定期的な研究討論に加えて、関連する研究者との意見交換も行い研究を進展させた。また、現地での政治集会や現職連邦議会議員、元大統領候補者による講演会などへの参加と観察を通して、他の参加者の反応なども含めて同時代的な知見を得た。帰国後は在米中に収集した資料の分析を発展させるとともに、国際学会での発表と意見交換を続けた。国際的な学術貢献をするために、アメリカにおいては言語的な制約から研究が進みにくい傾向にある外国における受容に関して、本研究で扱った事象の日本における受容を比較検証した。

4. 研究成果

基課題が対象としたカントリー音楽と保守派の連想が確立した時代以降における、選挙広告や政治集会などの場面における音楽の役割や、音楽家と政治家、活動家の関係について、視聴覚情報を含む歴史資料及び同時代の報道や資料等の分析をとおして検証した。特に、大統領や大統領候補者によるカントリー音楽利用の歴史を今世紀まで紐解き、党派を超えて利用される様相や、テロとの戦いにおけるカントリー音楽家の言動やそれをめぐる報道や議論を国際的な比較も含めて分析した。

大統領とカントリー音楽に関しては、ニクソンからオバマまでの大統領が、選挙戦やホワイトハウスでのコンサートなどにおいて、カントリー音楽の定義をそれぞれの政治的立場を反映したアメリカ像に合致させるように変容させ政治利用したことを示すと同時に、カントリー音楽の普遍的なアメリカ性の主張が白人中心的なアメリカ像を助長することの問題を論じた。アメリカ政府の公式文書記録や映像などを検証することにより、歴代の大統領が、選挙戦やホワイトハウスでのコンサートなどにおいて、カントリー音楽の定義をそれぞれの政治的立場を反映したアメリカ像に合致させるように変容させ政治利用したことが示された。特に、オバマ大統領によるカントリー音楽の政治利用については、大統領選と音楽の歴史を網羅的に俯瞰したベンジャミン・ショーニングとエリック・キャスパーによる研究書に事実関係が述べられているものの、その意義に関する分析は行われておらず、学術的な考察がされてこなかった。本研究では、白人性と政治的保守で特徴付けられるカントリー音楽を、黒人で民主党のオバマ大統領が選挙戦および在職中を通して利用したことに着目し、彼が一方では黒人のカントリー音楽家を招待したり同音楽のルーツの多様性に言及するなど、非白人のカントリー音楽への貢献を強調することによりこれまでの音楽像に変化を加えながらも、他方では共和党の前任者たちを踏襲して、カントリー音楽の人種的な特殊性には言及せず普遍的なアメリカ性を主張することにより、白人有権者へのアピールを行ったことを示した。カントリー音楽が政治的保守派の白人の音楽であると広く認識されるなかで、その意味がリベラル派からも利用され交渉される様子を明らかにした。

また、本研究では、今世紀におけるカントリー音楽の政治利用や現代アメリカにおける音楽家の政治との関係性とその歴史的な意味を探るため、現代アメリカにおける「テロとの戦い」が音楽家によってどのように表現され議論されたのかを、作品の分析や日米での批評を新聞雑誌記事や刊行されたインタビュー等を比較分析することを通して明らかにした。2001年のアメリカ同時多発テロを契機として「テロとの戦い」に関するプロテストソングなどが音楽界で興隆するなか、カントリー音楽界ではイラク戦争に反対するカントリー歌手へのボイコット運動などに見られるように政権擁護的な動きが見られたが、それをめぐる議論や報道をアメリカのみならず日本での受容も含めて比較分析した。

本研究は、学際的な視野からアメリカ文化を論じるものであり、関連する音楽学、歴史学、政治学等の研究成果も取り入れるとともに、特にこれまで左派の音楽と政治の関係に比して十分な学術的な関心が払われてこなかった保守派の音楽と政治との関連性に焦点を当てていること、音楽を1980年代以降の変容の相において捉え歴史的に位置づけていること、そして、日米の比較や日本での受容などトランスナショナルな視点を取り入れ国際的な学術貢献をしていることを特色としている。さらに、今世紀のアメリカにおいて音楽の政治的意味が交渉され利用される様相を解明することは、今日のアメリカ理解にもつながる実利的な意義がある。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 Tachi, Mikiko.	4. 巻 -
2. 論文標題 Country Music and Presidential Politics in the Contemporary United States	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Proceedings of the 17th Hawaii International Conference on Arts and Humanities	6. 最初と最後の頁 360-387
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Tachi, Mikiko.	4. 巻 -
2. 論文標題 Country Music and Conservative Politics in the United States	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Proceedings of the 18th Hawaii International Conference on Arts and Humanities	6. 最初と最後の頁 刊行予定
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計5件（うち招待講演 0件/うち国際学会 5件）

1. 発表者名 Tachi, Mikiko.
2. 発表標題 Build As We Sing: Trans-Pacific Interpretations of the Music of the War on Terror
3. 学会等名 American Studies Association Annual Meeting（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Tachi, Mikiko.
2. 発表標題 Country Music and Conservative Politics in the United States
3. 学会等名 18th Hawaii International Conference on Arts and Humanities（国際学会）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Tachi, Mikiko
2. 発表標題 Gender and Politics in American Country Music: The Reception of Country Musicians in the U.S. and Japan in the 1970s and 1980s
3. 学会等名 10th Annual Conference, Popular Culture Association of Australia and New Zealand (Melbourne, Australia) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Tachi, Mikiko.
2. 発表標題 Country Music and Presidential Politics in the Contemporary United States
3. 学会等名 17th Hawaii International Conference on Arts and Humanities (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Tachi, Mikiko.
2. 発表標題 The Emerging Women: The Reception of American Female Country Singers in Japan
3. 学会等名 American Studies Association Annual Meeting (国際学会)
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
主たる渡航先の主たる海外共同研究者	スマリヤン スーザン (Smulyan Susan)	ブラウン大学・Center for Public Humanities and Cultural Heritage/Department of American Studies・Professor	